特 7
7
71

飼籠鳥

五六

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』 請求記号 特7-71

ガラス使用

特7-71

佐藤成裕著

飼籠鳥

巻之五
巻之六

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号 特7-71

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号 特7-71

ガラス使用

飼籠鳥雉部目錄第五卷

勝成裕曰雉の属多しと雖も容貌皆一般なり予久彩小園て食餌を雉と名付又彩小園て綿雉と名付皆雉の名なつて時刻をしらす只予地震と知といへども予各色をしる事なし予園を食るよ堀くたりよ羽矢とをるよ堀くたりよ羽矢のさとをしるよ雉と云ふる雉のをし色故ふ雉の名なり

飼籠鳥雑部目錄 終

十七品

鷹（キンケイ 禽經）　錦雞（カキン 南産志）

轉雞　鷄雉（ケイチ 南産志）

鸇雉（クロキジ 李氏本草）　鸛雉（ドリ 爾雅）

鸐雉（カワラキジ 本草綱目）　白鷴（ハク 西京雜記）

孔雀（南方異物志）　金錢雞（セン 陽春縣志）

駝鳥（本草綱目）　鵝火雀（杜陽雜編）　大晨雞（ナンチョウ 寄園寄所寄）

翠雞（ヘキケイ 嶺南雜記）

白鷳（ハクキン）

鸛雉（ナガエキジ 本草綱目）　黑鷴（コクカン 西京雜記）

飼籠鳥卷之五

雉部 十六種

鷩雉（禽經）　一名鷬（通雅）　鴆雉（爾雅）　鷩雉（通雅）　山雞（禽經）

采雞（周書）

鷄雞（典籍便覽）　錦雞（禽經）　金雞（本草綱目）　丹鳥（左傳）　令鳥（傳玄賦）

赤鷩（山海經）　蜴蟻（典籍便覽）　山鳳凰（江西通志）

雀名

和名ニミキトリ（古訓キンケイ 和漢通名）

色黒く多くして其大サ雉よりハ小ニして

鶉赤く頸ハ黄毛の雞のごとし腹赤く

尾長くして裏ハ黒く其雌ハ全く

彩なく雉の雌と相同くして小ニ

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号 特7-71

ガラス使用

庭籌ゝて三四月の容よ
伏しもみ穀と与くて成長をべし
雞卵と与もに或いは文蝘珠與よべし
菜なり二三巢より二三巢より
牡蛎を食ればを素よりして卵の皮硬して
穀と為して能く成長す其雄も牡蛎
をてよし

山海經曰小華之山多赤鷩養之穰大
災

神異經曰王雞鳴則金雞啼王雞、錦雞
本草綱目曰時珍曰山雞出南越諸山
中湖北亦有之狀如小雞其冠赤背有
黃赤文緑項紅腹紅觜利距善鬬
博物志曰有羨毛自愛其采紛曰映山
南産志曰傳玄賦曰惟南州之令鳥惣
坤離而體珍被黃中之正邑敷文衆以
身鑒中之以顧影睎雲表之清塵
典籍便覽曰鷄雞形似鷩金項紅觜肉
味香脆桑羨甲于水陸之鳥雞可啖
禽經曰首采毛曰山雞腹有采毛曰錦
雞項有采嚢曰避株〻此説三種なり山
雞ハ乃チキニケイなり 錦雞
嚢ハカラクンきり

錦雞 南産志 一名鯨、鰲 正字通

和名カキヰ

色栗徒ク渡来ス形、金雞小似テ頸ヨリ
尾小ク紅ク紅ク柿ノ色ノごとし　黄
色ノ光彩ヲ含ム栗ヲ金雞ヨ
ハ同シ

本草綱目曰時珍曰爾雅所謂鷩山雞
者也逸周書謂采雞錦雞則小於鷩而
背文揚赤膺前五色炫燿如孔雀羽
梅詵星字彙曰鷩雉之一種也似山
雞而小冠背毛黄暖下赤頂綠色潼侍
中冠之以上之說皆金雞ヨリ小シ
桂海志曰錦雞又名金雞形如小雞湖
南北亦有之桂海ノ
ト叶

南越志曰鷄鷄山雞也利距善鬬
正字通曰駿騮似山雞而小即錦雞也
此說ヲ見レバ駿騮ヨリ金雞之一名ナルヘシ

南産志曰漳志鷩屬
陽春縣志曰駿騮石山雞相似以家雞
往鬬即可擒其羽文而有光以飾侍中
冠者也錦雞也他說乃テ錦雞ヨリ大ニシテ鷩
雞ヨリ次ノヨウ

本草綱目曰時珍曰鷩石鷩同名山雞
鷩人而鷩小鷩石鷩同名錦雞鷩文在

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号 特7-71
ガラス使用

絞而鷺文在身ト此説ヲ見ル鷺ニ鷺茂
山雞ノ名ノ如シ吐綬雞モ亦雉ノ名ナリ
能ク參考シテ和名ヲ與フヘシ
翠雞 嶺南雜記 一名鷺ニ似ル
和名ヘキケイ
先年清人持来ル乃チ想雞ナリ支大サ白
鷺ノ如シ頂長ク尾ヲ垂ル雄ハ翠碧ヲ
ナシ羽ノ藏ニ於テ青ク光ル形狀ヲ寫シテ
ヲ示ソヲ又清人ノ画ニ大ナル残
ルヨリ是ヲ名ルヨリ云ヲ後嶺南ノ産ナルヲ知ル
此名ノ出所ヲ考ルヲ闕法ニ倣ヘリ

嶺南雜記曰翠雞形如雞而極大徧身
翠毛余携一雙至家不數日而斃
梅誕生字景曰鷫音先似鶴碧色
惟説ヒレタリ梅又西洋ノ禽ヲモ
多ヲ出サヌヨリ長濱モ先年来ルト云ヲ歟

轉雞
通俗ニ能ク見ル鷄雞ノ雌ヨ全雞ノ雄ヲ
一変ヨ久シテ和合シ遂ニ卵ヲ生ズ
能ク況ス又金ノ色ノ如クシテ
鬼車ニ野雞ノ雌モテ庸ス此ノ一同ニ
重クハ多年ニ成テ変ヲ図ルヲ

多くは雄を忍れてお和かくし故ゟ雛より一旬ゟ成長せしむる時卵を產そ又雛の形志漏ゟして母雛をお合して学ぶ雛庵雛となる雄雛ゟ

鷄雉尓雅。一名雉雞 花鏡 野雞 漢書 介鳥 禽經

原禽 典籍便覧 華蟲 尚書 疏趾 典禮 積陰 通雅 聞 習雀 事物異名

良游 同上

藻翰 典籍便覧 玟尾 同上 戸魯還 事物異名

迦頻闍羅 梵書

播州芸ゟ山野とし て自然ゟ 薗ゟ秋ゟ冬ゟ

香名

和名カヽヨドリ歌書 キヽス古名 ミヽシンバン日州方言

並て捕て食をへ一夏月ゟ毒蛇を孔食ゟ故ゟ人食をするのなし一名一食をれゟ小癒を發して倉ゟて倒もの一越れとも元ゟ山禽の故ゟ人ゟ別深ゟ一十日の後食物の乏しき時ゟ並て常ゟ手る私を足ゟ長サ五尺斗深サ六七寸ゟ土を左右ゟ掘り揚て其中の土を棄ゟして平ゟなゟ一五穀を土と相雜て置く是を伏胡麻と云又逃胡麻殘雜て置く時ゟ毎朝集て伏胡麻の味ゟ殊て

納る忘るるなく狎るなり乃ち野狐の
燒嵐の狎ると和同一これ乃ち野雞
同類の秘傳なり如斯能く狎る時よ
網一て捕る一一

爾雅曰鷄青質五彩背備而章曰鷄
群碎錄曰野雞漢呂后名雉改雉爲野
雞

蕙化州志曰野雞雉也雄者冠長尾
文翅敢鬬雌者老旦鳴似小雞而小
雉の鬬事世說のおとし一山禽より雞の
ことく鬬の野雞の名是より因ていぐ多る

白雉

和名シラキジ

古書に稱する所なりとも諸州に於て
山野希に見るものなり老一て白きなり
越前能登なるのみ安
志うれいも形狀小ぶりなり乳白雉を
捕て雄雄たる一毛除も遺る時元の地
雉に遺る事なく一一やも一一亦
離雉の白は數年洞のと雛も遺るなし
さりなから目と病を生一一地雉の
白き目の病を生ずるなし乳雉は廣さ
庭籠に入砂土を多く一一き砂を浴さす一一

食物も五穀を与よりも多くは大麥を与ふ
鋭よ及て迅ク速かなり
しと唐土の人の傳なり
二年長ずるより白雉を獻ず
大よ百官を朝に召て是を視せしむ百官上
瑞を奏して祚賀を极よ元を改て白雉元年と
もしと云

鸐 雉 李氏本草 一名 海雉 禽經

和名クロキシ

諸州より希に出るなり常の雉の變
て無斑きのみ能をして常の雉よ變る
ものなり數年能をして變せざるによ
れば肌し黒よも稽くなり志黒くして光沢なる
なる、上品なり多くは煤黒なるもの多し

李氏本草曰白鸐下曰雉變有黒色者
名鸐雉

物說乃チクロキジなり

鸐雉 爾雅 一名鸐鷄 禽經

翠雉 禽經 山鷄 同上 山雉 本草綱目

和名ヤマドリ

諸州共に山林の内よ住て常よ散狀雉よ
同くして尾長く文彩尤美なり四月ニ
蓼藍の中よ卵十二を生ず雌雉十二を
なりとりよ雛を孵して養て人よ到

深きるのなし山人常にこれを山雞人を迷はすと実よく然り況や和名のごとく栗鼠にて山中より在りて或日雨降り小雨の宿をして毎止をりてかしく出て逍遥とみれば一ッの鷽雉のつて毎翼折りをり尾も抜してそれバ又先より出て遥そ茂林の中より猶逐て数百歩の深きに及ぶなよく直よきにあらず実に岩石大樹の間より入て猪の獣のごとく害ありて皆小雞の訴蒸なりとしるして一の人家より毎りてきて道路と問ふるに多く漸く暁よりて遠近明白になり

本草綱目曰時珍曰鷽羣羽貌雉居原野鷽居山林故得山名又頌曰伊洛江淮間一種雉小而尾長者為山鷽人多畜之樊中即爾雅所謂鷽山鷄也又時珍曰山雞有四種名同物異似雉而尾長三四尺者鷽也似鷽而尾長五六尺

蘭山本草訳説小雉なり雄なり茶褐色よく雌ありて波あるを俗に雉本草綱目一名文禽師曠鴝雉と云へり雌ありて斑なり茶褐色よく尾の形よく雄に同と云へり

和名ヤナガキジ　ミマキミ

先年唐土より来る形状、画て鷄雛のごとく斑文ありてこの尾の長サ三四尺ずつ又彩雉のごとく玉英ありし

本草綱目曰時珍曰似鸐而尾長三六尺能走旦鳴者鷄雉也俗通呼為鸐矣俗人二物を誤ぜしかゝる歟相同さゝなるべし

又時珍曰鷄鸐皆雲健自愛其尾不入叢林雨雪則岩伏木栖不敢下食往々餓死故師曠云雪封枯原文禽多死南方隷人多捕其尾於冠其肉皆美于雉

傳云両足之義有鷄

稗説のごとく鳥も亦大雪の時は木栖して餓死するなりし

陸佃埤雅曰鷄走且鳴首尾喬如故字以喬

字彙曰鷄音驕雉名微小翟走而且鳴尾長六尺肉甚美諺説曰両足之美有鷄世説を見れば彼の山中ふかく多くて人捕て食するとみへたり

鷄 本草綱目 一名鸐 鷄 陽春縣志 樊雞 同上 筹婆鷄 同上 肇慶府志

和名カウライキジ

近代往々飼之地多し

彼の地より来る故よ高麗土沙の名づけその形雞よりおゝ肌しくして大なり然首上に毛冠を生ずこれ雞と同じ頂小白環ありて雞と一般なり飼法粟麥を与ふ色一時ならず飼よる雞る事ありもよし其羽黒黄而褐故也時珍曰鶡状類雉而大黄黒色首有毛角如冠性愛其黨有被侵者直往赴闘雖死猶不置故古者虎賁戴鶡冠

舍經云鶡毅鳥也諺不知死是矣性復粗暴每有所攫應手摧砕上黨郡今潞州

肇慶府志曰鵚雞出陽江春似青雞而高大頂有兩角

以上の説よ毛角と云兎角とありもや上ゝ毛角のことゝ知り左おうき時ハなしや老鳥ゝ

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号　特7-71
ガラス使用

陽春縣志曰鷄鷄鳥啄雞頭背金黃色
腹純黑目赤凡長尾長下垂鳴聲鷄鷄
故名性蛇人捕食之能治骨節打傷損
痛俗名鬱雞又名菉婆雞

肇慶府說云一陽江春山出之云又
陽春縣志の說よく符合せり十二說ハ山林よ
生ずと云ふぞ出るとなるを見れバ北方上棠
の產を人の飼ひなるべし

雞の形養て人より別深くうづくまり
鷄鷄能く別深をもて故に籠を覆ふ
雞を取りて又もや雞より
ち今の雞のおとく人の手より出る故なり雉及

雞 雉ハもや山生の雞を養て人より別深くうづくまり
足も雞より養てまるくうづくまりて
ときハ人より別深せざるをもて云るなしいまさ
もや雞よりいる事なきゆゑ鷄の名となる之
原野の多なり今ハ人家の多

白鵰 西京雜記 鶱 爾雅 鵰 閑客 博物志 越禽 事物異名 鵰鳥 典籍便覽

白鵰 山海經

和名 カノコトリ

先年中國より 来るもの大サ鴨雞のごとく
背白く細くなり 漣(セイ) 漪(カイ)のごとくなり
腹足ハ二歳を経て紅冠出るもの也 退て
蓋大ニ源紀なり雌ハ小なりて

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号 特7-71
ガラス使用

越ノ者は嵐色にして雌雄のごとし籠
中にて黍を与へ又ハ牡蛎を食の中に
雑てかふときハ春に至て卵を生こと三四十
个に至る皆雌雞に伏さしむべし悪く鶵と
なる樊中に細砂をたくはへ入て畜ふべし
細砂なき時ハ足の指典りて宜しかゝれバ
多くハ脚趾に癥出るものなり
山海經曰單張之山有鳥焉其狀如雉而
文首白翼黃足名曰白鵺
此説に依て見るときハ此鳥の中國に出る
事久し
本草綱目曰頌曰白鷴出江南雉類也
頌曰即白雉也時珍曰鷴似山雞而色
白有黑文如漣游尾長三四尺體備冠
趾紅頰赤觜丹爪其性耿介李太白言
其卵可以雞伏之亦有黑鷴
閩書南產志曰鷴白質黑章紅頰尾長
數尺爾雅所謂雗雉郭註江東呼為白
雗西京雜記閩越以獻漢高帝厚賜之
孝徳帝のとき長州より白雉を献して大に
喜て群臣を召して賀を奏しむるも漢
高帝の説に依てなり
嶺表新語白鷴者南越羽族之珍乃白
雉也周武王時越裳貢白雉建武中南

越徽外蠻獻白雉唐粛宗時日南徽外
蠻究不事人獻白雉皆白鸚ゝ
ハ等ゟ白雉と称する八皆白鴉の一種なり
松溪縣志曰白鸚形ゟ雉類白質黒章
尾長三四尺距觜純丹ゟ有青黒者爾
雅白鸚白鶡
鉛山縣志曰白鸚形似山鷄而色白有黒
尾長距觜純丹最為可喜
正間暇故曰鸚爾雅白雉南人呼間字
如麋則鸚即鶡音之轉也西京雜記南
越王獻白鸚黒鸚各一隻賞見黒者久
之漸變為白蓋緣未成長故黒耳後変
為白也
世説の玄鶴、雛なり
肌り
黒鸚 西京雜記
和名 コクカン 和漢通名
白鶴変して玄ゟ其きその真なり即雛の
白雛なるを一ゟ二ゟ歳ゟして漸く寂く
紅色となる
西京雜記曰南粤王獻白鸚黒鸚各一ト

此黒鶏ハ未だ歳を経ざるものなり故に総て
して白鶏となりたるべし近時の人を
小児にいたるまで黒ハ雛なる事を知らず

孔雀 南方異物志 一名 越鳥 本草綱目 南客 異物志 孔雉 廣東新語
雲南客 典籍便覧 鳳友 事物異名 文禽 同上 都護 同上
孔家禽 同上 倒虎 同上 摩由邏 梵書
番名 パアウ
和名 クジヤク 和漢通名

日本紀に孝徳帝大化之年新羅より孔
雀を渡て獻し事なり兼名苑の注に
云く孔雀俗に官尺を訓も元来南国暖
地の山野に産する物にして今皆籠中に小
養ひ雛を生せ春卵を取るにまた多月の
中より古飼に牡蛎を相和して飼ふ時は
其卵実して盡く雛となる雛より育るに
秘法なり五穀の外人の食すべき物ハ皆与へて
食しむれハ病気の出るとき或ハ多く飼
雛しそる時ハ多く食物を与へて遂に又飼に
附く事なり諸鳥と異にて打し飼雛次
又飼き易き鳥也雛より雛物を以てやし
なふ時ハさのみむづかしくハなし波の国の
山野にて野雛山雛のほどしし蛇蜈蚣を
食ひて又穀小かきらず此意を考て常に
食物を雛く与ふ可也中或ハ夏暑の頃ハ

蛺蝶蚯蚓を与ふべし　又月に諸虫を充て
与ふべし　本朝食鑑よりいふ　孔雀は交趾
呂宋よりいづる　形鸛に似て頂上より
緑毛三四莖ありて冠のごとく長さ六七寸
許眼毫淺紫白斑ありて背翅皆緑毛よ
り上よも色の金翠の圓文をなして尾
連綴のごとし　雌は冠及尾の金翠なし
春夏時をりて尾を張るも傘のごとし
人の笑来を厭ひて尾を張るを見る時は喜て尾
を發ち放よ廣東新語もも此説を
載ぬ

本草綱目曰時珍曰按南方異物志云
孔雀交趾雷羅諸州甚多生高山喬木
之上大如鷹高三四尺不減於鶴細頸
脊背頭載三毛長寸許數十群飛棲遊
罔陵晨則鳴聲相和其聲曰部護雌者
尾短無金翠雄者三年尾尚小五年乃
二三尺夏則脫毛至春復生自背至尾
有圓文五色金翠相続如銭自愛其尾
山棲必先擇置尾之地兩則尾重不能
高飛南人因往捕之或暗伺其過生斷
其尾以為方物若回顧則金翠頓減矣
山人養其雛為媒或探其卵雞伏之飼

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号　特7-71
ガラス使用

以猪腸生菜之屬聞人拍手歌舞則其
性妬見采服者必啄之
北戶錄云孔雀不匹以音影相接而孕
或雌鳴下風雄鳴上風亦孕
冀越集云孔雀雖有雌雄將乳時登木
衰鳴蛇至即交故其血膽猶傷人
禽經曰孔雀見蛇則宛而躍者是矣
嶺南雜記曰孔雀産廣西而羅宻山中
間或有之雌者尾短無金色雄者尾大
而綠金翠奪目其毛羽初春而生四尺
後復凋與花相榮衰然自愛其尾欲棲
息必先擇置尾之地棲者先施網器俟
其兩尾露而宻不能高翔羅網器不首
妄飛恐傷其尾至死愛護之土人取其
尾每數十莖莖長短相雜為一尾價亦
不甚貴其徧身毳毛及尾毛之破碎者
取以織補服其肉則无飽饋如鵝鴈味
亦如之食解百毒然食孔雀肉則股藥
無効其尾金眼有毒孩童戲取啣口中
有死者其膽與糞尤毒能沒人而孔雀
尾掃祗中攻喜食之尾能粘龍膽膽宗
時禁中毒牽諸閤擲龍腦以辟撒過則
以孔雀尾為帚掃之腦皆粘聚尾上無
有遺者

又曰養孔雀須以一間房前開窓牖使其向明四面通透橫一本架令棲息其上飼以五穀豆麥勿合飲水每至秋夏田中拾螽斯蟋蟀蚱蜢之類飼之引令聽事令慣見賓客又盛夏或患眼病以鵝翎筒子灌少清油以清水洗之如根不開則擘口蛺以小魚蝦及切蒭少許啖之貴其涼冷切不與釀酸雜食則減精神昏暗毛羽馴養＝頗久性與人習每至晴明軒翥其尾廻顧白視之名曰朝尾見婦人童豎綠衣華服則放尾以誇之或妬逐而啄之或聞歌唱絲竹之聲則放尾而舞（尾八尾ノ字ナルベシ）

嶺表錄異曰孔雀雄者尾長數尺生三年雄雞自斷其尾無尾雌者尾自黑其身以大多養孔雀採金翠毛為翎

桂海志曰孔雀雄者尾長數尺生三年尾始長歲一脫尾夏秋復生羽石可拉目損人伺以猪膽及生菜惟石食茲

廣東新語曰性好美色喜與美人相押美人鼓掌或彈指則應節起舞兒童衣錦綺與戲或拍其尾則與兒童對舞兒童不舞輒趁而啄敬衣垢面者尤啄之

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号 特7-71
ガラス使用

悪其不類已而謂其性妬忌非也
以上くさ説よく爺舎ものそ細よ是我説く
〜る事〜

金銭雞 陽春縣志

番名

和名 セイラン 和漢通名

舶来ノ圖畫ニ出ル者ニシテ
なり又番書の中よりその
皆西洋の地方ノ產ニ
事を志ス要領なる物ニ
その形状を詳よ説く
かくよ物よ載ス孔雀ニ
孔雀よりまる事を詳ます又余が
著ス珍禽廣録よ諸説を挙て尚詳
よりす

陽春縣志曰金銭雞生山谷中狀如孔
雀而斑文小金翠不足尾與雞相肖養
養差同孔雀而性馴倍之
よ乃説これるり按るよ西洋の書ニと
りおい什多なり用て簗卵よ似る事実
事ス

大晨雞 寄園寄所寄 一名鵝鶵 典籍便覽

骨托舎 異客揮犀 爰居 漢書 骨

番名 ゴロートホーゴル ゴロートハ大也 ホーコルハ鳥也

駱駝鳥 神輿外記

駝鳥 廣志

駝馬 職方外記

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号　特7-71

ガラス使用

和名ヰトリ

俗ヨリ風ヲ扇ヲトリテ

ヒなり書ヨその図

類ル多リ和漢三才図

いまの駝多よあり

往年阿蘭陀人持来て貢ス其

形状天鷲小類して

小して黄色を帯

蘭里く大并てて

類して肥大ヨ蹄の

竹ヰを食ヒと云ふ

なり食物ハ大麦参を食ヒ乃駝鳥を

食ヒよ和名ヒ

嵩園嵩所嵩曰萬曆壬子小人國入貢

泊石城其人身長二尺絆髪綠睛衣綠

衣多摺縫戴方帽有大晨雞重五十斤

高四尺其人御之如滇南人之貢象以

小御大見者駭之

典籍使覽曰鵜鶘形高七尺鮮人言

坤輿外紀曰南亞墨利加州産駱駝鳥

形似駱駝禽中最大者背高于乘馬之

人走時張翼大如棚疾于馬腹中甚軟

能化生鐵

ヰ鐵を化ヒとヒふ

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号　特7-71

ガラス使用

雞及鷄のごとき大なる
物なれども化をあらはし
なよ夜き物を食して腹中一ぱいとなる
のみ

坤輿外紀又曰卵莫亞有巨鳥吻能鮮
百毒一吻直金錢五十
竹說もまた是なり

後魏書曰波斯國有鳥形如駝能飛不
高食草與肉亦噉火日行七百里廣
廣志曰安息國貢大雀鷹身駝蹄蒼色
拳頭高七八尺張翅丈餘食大麥其卵
如麈其名駝鳥

竹二說駝鳥と名くるも今の駝鳥よ
りは大なり今の駝鳥は翅翼なし乃竹二說ハ
大鷹雞をさしていふなり

本草綱目曰時珍曰駝象形藏器曰駝
鳥如駝生西戎高宗永徽中吐火羅獻
之高七尺足如橐駝鼓翅而行日三百
里食銅鉄也

大乃說も今の駝鳥にあらず

西蕃記曰富浪有大鳥駝蹄高丈餘食
火炭卵大如升

星槎錄曰竹步國阿丹國俱出駝蹄雞
高者六七尺其蹄如駝

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号 特7-71
ガラス使用

墨容揮犀曰骨托舍出河州狀如鵰高三尺餘其名自呼能食鐵石

唐書曰開元初康國貢駝鳥卵

吾學編曰洪武初三佛齊國貢火雞大於鶴長三四尺頸足亦似鶴銳嘴勢紅冠毛色如青羊足二指利爪能傷火腹致死食火灰

以上の文説如くなれども人只今火雞の如き物を見ず今の鴕多くあれども能傷火腹致死と云説未詳或書に傷人腹と云これまた解しがたし一説に先年舶来の大卵一つを実よ大なる鴕の大なる雛出たり通例今の鴕多乃卵ほどの大さなりのおとし一比類なく親くみるに乃孔雀の如くにして猶小さくこれまた説今の鴕多よりおそしてもと大なる雛の大多くなるをもてなるべし

博物志曰條支國臨西海出獅子大雀又漢元帝時有大鳥如馬駒時人謂之爰居

物説もと今の鴕多よりおそして首大多く垂るよう俗説なり

駝鳥 本草綱目 一名大麻雀 前漢音 駝雞 典籍便覽 鴕駝 雀事林廣記

錦駝雞 廣東新記 火雞 音学編 蛇雀 賢慶縣志

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号　特7-71

ガラス使用

香谷 カスワトルス又ヲメウ
和谷 エクイトリ イシワリ
先年阿蘭陀人持来るハ、麁牙疣毳なり、天
明年中より渡るハ長濶よく
毫牙なく、毳ハ秋九月の比より冬を
衰て搖動し、うるおひ多有ハ入て遒う
死そその大サ鶉のおとり、翅翼なくなく
地上を歩りして鷲鶚の如くなりて乃
野猪の脊のごとし、形上ハ
肉冠ありて頗る鷲に
似うらうらのごとし、その
皃黒くして雛の雫よりも
かくて変ハ鳴事をきゝ
又藥をねてくらハ火炭及小石堀をもつれバ
よく呑ものを飽れバ糞よ化そを云ふ
かくて儲糞に石泥なりおもしてこれバ
来を附て食しめ又引ハ通雅小石よ
石泥のごとくして作しうごとし
石より先ッ糸ゝ絡て石の如るに及ぶ
糸ゝ絡るべし本朝食
軈ち彼の人麁渓域
穏小性来阿蘭陀國より貢を收ル
鷲よ形して大小ある雛小ハ
能く石竹末をくらハ彼ものゝ人葉箭
貨物を負しむ叶ハ本草の佛説小
関てその形状を記よ一も今の舶

名の説よ尚るよと雖、一葉なり書よりも
也多八路苑多の事
亜ぬり今の苑多も按説小雞入る故よ
苑多ハ名ぬりとも乃チ火雞へ書入
特来る者皮とも
皮又價も亦考ー
嶺南雜記曰火雞毛黒毳毳下垂高二
三尺能食火炭相傳火雞火巖毛為火
布此雞毛焚之亦成灰燼口非此雞亦
自海外来
今の苑多ハ什説よ源て火雞とも称れとも
火布の説ハ信しがたし

掌卖鳥獸考曰安息大爵鵝如鷹身蹄
如橐駝色蒼擧頭高八九尺張翅大餘
大麥又滿剌加火雞軀大如鶴羽毛雜
生好食火炭駕部員外張汝弼親試嘗
之
什説安息の大爵ハ乃チ大雲雞なり波剌斯の
火雞ハ今の苑多又
皇甫牧王亜記曰骨詑如鵰食鐵石
典籍便覽曰大雀出安息國高八九尺
張翅丈餘食大麥其色蒼其頸如鷹
世二説ハ乃大雲雞なり
職方外記曰孛露有一鳥名厄馬最大

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号 特7-71
ガラス使用

生曠野中長頭高足翼翎栝美麗通身
無毛不能飛足若牛蹄善奔馬不能
乃卵可作杯器今番舶所齎此鳥卵數
物也

一説二物を兼て説く通身毛無能飛と
いふとき今の駝鳥に似たり足若牛蹄と
云時ハ大最雛なりされバその物と見えぬ
見て自見の一説なるべし
して古人の説我が見たるところと異なる
のみなよ二物混雑して説をなす乃中
世の人ハ古人の説ゆゑ物を弁ずるにもむい物と弁ずる
を恥一説なるべし二物を混して一物と

なるハ大よ誤れり

瀛崖勝覽曰三佛齊國出火雞大如鶴
身圓而頸更長頭中有二紅軟冠狀如
紅褐夫喙渾身毛如羊毛稀長者色脚
長鐵黒其爪甚利或爪破人腸腹出即
死好食焃炭因名火雞用扶揸碎打不
能

一説志祥入破人腹腸の説いふところ者へ
ひとの腹腸ハ破るといふハ果して然るや
否ハ

却火雀 杜陽雑編

杜陽雑編曰順宗初拘弭國貢却火雀

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号 特7-71
ガラス使用

盛以水精籠懸柃寝殿夜則人持蝋
炬焼之終不能損其毛羽

飼籠鳥巻之五 終

飼籠鳥鳩鴿部目録第六巻

騰歳稲田鳩ハ古に在る廻に登り啼せ候
流せす雄ハ晴を呼ひ雌ハ雨を呼ふ三枝の
禮ハかのを以老丈是を貴て杖頭に刻し
雉子是をもて鳩車に乗る其の名羣禽に
通る事なし老雉是を養てこそ
禮と徳とを共に学ひ来るへし

鴿（イエバト）雅坤

孔雀鴿

地白（ホシコクジャク）廣東新語

青鳩（アヲバト）（ヤマバト）薫州府志

糠鳩（ナニキニバト）本草綱目

金鳩

斑鳩（鳥鍚食経）

二十品

白花鴿（ゴイシバト）食醫心鏡

阿蘭陀鴿

鳩（キジバト）周禮

紅鳩（ベニバト）潼州府志

真珠鳩（南畧府志）

榜葛剌鳩

勃姑（ミヤコドリ）六書故

鸐鳩（高奢縣志）

練雀鴿

猩羅鴿

青鷴（リウキウバト）本草拾遺

烏鳩（シマバト）

長嘯鳩

飼籠鳥鳩鴿部目錄終

□□□

鴿（坤雅）一名鵓（楊子方言）鸐鴿（禮儀詳註）舶鴿（八閩通志）飛奴（閑元遺事）

迦布徳迦（梵書）

番名ドイヘン

和名イエバト　トウバト　マバト　ドバト（江戸）　カヒバト　カワラバト（舜水談綴）

或云ハト飛奴の俗名ゝとも云ドバトと云ハ賓鴿多く樓上より多く棲むゆへ云ゝ一説なり

かゝる説ありよく多く鴿を飼ひ鴿舍の綱を長くし鴿舍と園くゝ鴿を愛舍とを云ゝ也鴿人その鴿を飛ばすれ

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』 請求記号 特7-71

ガラス使用

とも多くは尾毛なり
黒との二種あり或は班白く或は
頸黒く大概此數色を
白花鴿（食医心鏡）
和名ゴイシバト
雪白と漆黒乃甚だなり
おとり一方多し
用ふべき物ハ
本草綱目曰宗奭曰鴿之毛色於禽中
品第最多惟白鴿入藥又時珍曰處
人家畜之亦有野鴿谷品雖多大要毛
羽不過青白白皂綠鶉斑數色眼目有
大小黄者綠色而已亦與鳩為匹偶
世説の菜及食用ハ純白を用ふべし皂
綠ハ尾を翻翔するを為匹偶とし大小誤入必ず
乗なし
陸佃埤雅曰鴿雌乗雄逐月有子
本草綱目曰時珍曰鴿性淫而易合故
名鶻者其聲也
竹説鴿牡淫ふして純く孕れ
ども逐月有子ハ雌を養ふ事一月を隔て
二子を生る人皆雌を養ふ時ハ
雛穀を食せずして人の養意とする為

飛来るときハ巣を與ふべし其の家に帰る
ことを忘れて多く食に離れがたし又之
数里の外に送ると雖も三日にして帰る
此巣より飛出るにまき食物なき故之是を
食しむれバ能く雛をなす雛より巣につく
飼ふときハ実に飛ぬの為に崩れり或人一
雙を捕得て籠にし家に飼ふに四十日
ふしてその馴深なると識に籠より出す
時に即時に数里の外舊所に帰るといふ
八閩通志曰船人籠以泛海有故則繋
書放之還家故又曰船鴿
此説実にしかり雛より能く飼ひし飛して
是を数里の外に放つ時ハ極めて家に帰る
事疑なし
開元遺事曰張九齢少年時家養羣鴿
毎與親知書信往来唯以書繋鴿足下
依所教之處飛往投之九齢目之為飛
奴時人無不愛訝
教ゆる飛のおもとき未信しがたくし
瀲州志曰鵓鴿性好羣飛
此説のおとしまそ羣飛れ迯しとも遠くいり
もして家に帰る人家をまもる事をなす汝
雲塗縣志曰鵓鴿毛色多種巽健飛高
者貴

此說しかり舶鴿のごときハ能く高く飛ヿ
あたハざれハ用を爲さず

合八縣志曰鵓鴿一名飛奴毛色品第
最多惟雄視配不混庖人掌供六禽鵓
鴿其一也

阿蘭陀人長崎に来てハ鴿部屋とて庭籠の
如く作り毎朝その雛の赤毛の生ぜざるを
えて料理につかふ毛生したるハ肉硬しとて
食する事なし彼人此雛を朝夕食するハ
一切の小瘡を發せざる爲也と云此說虚なるも
有ぬれども日本人ハ此雛を食する事を知
らず

食物本草曰鴿肉悪瘡疥癬風瘙癰痛
風疾

此說を見れハ阿蘭陀乃雛を食するにあらし

華夷續考曰山東無虎浙江無狼廣東
無毛蜀無鴿

その種乃生ぜざるハ風土のしからしむる処也

練雀鴿

此種も又鴿中の一品也その形体ハおなじく
して頭上に毛を立て練雀のごとくしその
色ハ多くハ尾毛なり別に賞玩すべき訳
なし

孔雀鴿

元来ハ海舶載来する鵞鳥を記したる説なり　唐土にて雁名有べし　形状乃ち鵞よりハ小く雁よりハ大なり　その尾の枚数十二枚　或ハ十六枚　或ハ二十六枚ともいひ定めがたし　その羽色もまちまちにて　多くハ全白とも　或ハ黒白おまだらなるものもあり　又白く尾の先き黒きも有　又全身黒く尾の先き白きも有　又全身灰色にて尾の先き黒きも有　又全身黒く尾の先き車人先年大清より持来るの鵞鳥　長崎方言

阿蘭陀鵞鳥　一名本国鵞

番名ドイヘン

阿蘭陀人食用ニ飼来る長崎の地ニて

鵞とお雛て羣遊び長崎の人皆を中ニ

鵞とし阿蘭陀人ハ

皆皆舶上ニ養て猶々食用の備へなりその

形状乃ち鵞ニ異ならずして大なるのみ

真色もまちまちおおむね白黒斑を

胸き毳を吹ニ入るる時ハ胸を漫つて薄くしき

ものその毳ハ綿のごとし　阿蘭陀人

及ビ婦女ハ皆これを愛玩とす　又車人

鵞ニ異ならず　笑ふべし

至る処に棲むのみならず又張九齢うたてく飛奴乃
亮に名を命ずる事一ならず
正字通曰彼斯舶上多養鴿に能飛行
数千里放一隻至家以為平安信
杜詩乃ち番人の舶上に鴿を飼ふなりと
是人能れる事の久しきを知てなり
帰る事一般
還羅鴿
番名
蓋し時に悪寿なり長海を渡りて
還羅国の唐人阿蘭陀人も是を載来るこも
然れ共鴿よりて背乃色も長嘯嘴の
ごとし

陸に至ても翼うごかす白の斑あり是乃ち
鴿也雑に非ず みな飼ふ
雑色のおなじうなり
地白 廣東新語
番名
和名 ホンゴクジバト
阿蘭陀人載来る者
おゝ一大よりして總身墨白毫斉
又小雑よりして背くの雑色をいふ事凡
廣東新語曰鴿之大者曰地白廣州入
称鴿皆曰白鴿不曰鵓鴿地白惟行地
不能天飛故曰地白。

則此書よ説く事
赤團鍋とおもふ乱し
又日本の鍋よ比べ
別天笠地方の鍋な
常の鍋よ、つくり別
鍋の中へ上ホなり
地上よ在て大穀のみ
逆一人とれべ一把又
おく老て齢をなる
なりていは鍋を囲て
飯粒を与て生
煮一自然と柔麦
好て食するをよろこぶ
皆鍋當を作りて
常い阿蘭陀人
西洋乃人のつねの
とす日本にて雛鶏
肉て雛肉さへ食せ
鳩 周禮一名野鴿 醫學正傳

香名

和名壊鳩 古名ハト 古歌 鳩 名物 十三ハト 俗名

ヨソロシバト 西土方言

古歌 ○○○○○○○○
字残 ○○○○○○○○

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』 請求記号 特7-71

ガラス使用

支と名知土俗雑鳩とよりも允漢土の書
籍に單に鳩ともあるハ雑鳩ハ医学正傳よ
左盛龍の註よ野鶫ハ雑鶫ハ單に鶫と云ハ班
鳩ハ太和本草小班鳩をいふバトと訓るハ誤りハ
又肅水渓編よ班鳩を大和本草より皆誤る
班鳩を雑鳩とせ鳩の古今統く為して
人のしる事多の秋楸もまた人の新き
よ出る故和漢の書籍ふるき害を
考なしまよりて却て班鳩鶫鶫英

册書よもいて作〻正して渓日を得る
事なれ共多洪洲井よ山林の庭際園
圃の間よ来て食をとりともむねて数を
食よしられども数十回ふるまず大サ鶫の
如しおし大小無数ありて濃渓の
雌雄ハ雄よりハ胸腹よ斑點ありて雄ハ
ハよりハ胸の遍みをなし
吴る蘭黒く長し多くハ雌雄ともよ褐
上よあつまる三四月よ秋よりくるまで
樹上よ在て鳴くその声を
十度まて鳴ハ絶なしむかし某

候閑八例ある
奉にのり十連ハ更よ
なり此説か関てみれバ
計るか大抱ハ文聲七聲
院殻の山内とるて十之
地よ手て多よ能
見れ化土の鴿よ勝
其巣之四月よ樹上に
枝よかり枯枝を
巣次其卵より盡
て死も抱とすれ
対一巣ととの雛を
雄より雛よ食
雌を与ふれども更よ
同ハ能く到深とりよ
年能く鳴く年山驒の
出れも自樹のそのかり
淡黒なと奉よ化生
斎主まるよりて

周禮曰仲春羅氏獻鴿以養國老

嘉く養よりととを中る未巣ととき摂
鶏の毛を入て巣よ
殺次を性る巧抱の
雛之ゝ或をゝ文穀
ゝより雛よ食
雌を与ふれども更よ
同ハ能く到深とりよ
年能く鳴く年山驒の
出れも自樹のそのかり
淡黒なと奉よ化生
斎主まるよりて

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』 請求記号 特7-71
ガラス使用

如此鳩の家を用る如き鳥は不能巣
禽經曰拙者莫如鳩不能巣
此說のごとく巣に鳩の家と用て拙きものと
云乃今の雉鳩なる事明白なり千歳の
後の古人乃諮よ箭令をもて候ひみるべき
詩經鵲巣曰維鳩居焉
世說よ因て禽經ふみもて
爲をるものあるにあらざるに
鳩う卵を爲をといひて、その性の粗惰なるを
云のごとく敢て自ら巣をなさゞるなり
李氏承帥曰鳩性拙多而拙於爲巣繆

架數莖往々隨卵天折雨即逐其雌鬻
則呼而反之
時珍ふ此說甚妙へ矣よりてその雌と逐ふ
ことあるを天氣曇りなる日ふ鳴てその雌を喚ぶこと急事を
促して雌ふ進むる所以なるべし
殺て鳩も餘もまづ嗽をおつまてゐ接して
後よお交る之鳩の類ふ似しうち此鳩ハ
ひとり卵を生びをといふふ大ふ謬へ又名ふ
拙よ拙鳩と名ふ拙なるも時珍ふ此說より
出る事をもて名ふあらざれども
拙鳩と云て雉鳩となる時ハ暮ふ弁し暑ふ

巖接幽事曰續漢禮儀志曰仲秋之月
賜八九十老人杖々端有玉鳩不咮之
鳥蓋取不咮也風俗通記漢高故事老
未可擾
日なをとて希よ鳩の刻り身たる枝を
洗くそのつり汁洗りり出てその由書い
又久一
遵化州志曰鳩不噎之鳥也
又佛不咮よとる事猶ほ又鳩よ三枝の
禮あるも実にしてうり老鳩いよ立て弱
鳩ハ皆その下枝小折り
青鶻 本州拾遺 一名青鳩 陽春縣志 禮記上 鳥同 黄褐侯 島錫 食經
和名 リウキウバト 尺八バト 琉球言
琴古 泉州の地方より琉球人を捕り移し養ひ
育て薩州へ持来る。薩州の人是を
尺八鳩とりあるなく故よ尺八鳩乃
尺八を吹く声に似る
名鳩鴿の類多しとも是を
食よ此鳩獨り粒食せず
色鳩と呉る人靠水後脚
ヤマバトとあるハ誤り入ヤマバトハお同して頭る
大入その形状お似るにより
形状ハ善鳩よ能く似て頭る小よ胸背黄

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号 特7-71
ガラス使用

多のごとく多し

本草綱目曰藏器曰黄褐侯狀如鳩而綠褐色聲如小兒吹竽

是乃尺八のごときものなり

陽春縣志曰青鳩狀如鳩綠褐色一名黄褐侯性喜食橄欖俗呼欖鳩

嶺南雜記曰綠鳩似斑鳩而色綠自廣西来相傳每年九月黄魚化為之水集岩樹間網之輒得奥東甚貴之而奥西以充庖黄魚者石首魚之事也

陽春縣志曰火鳩狀如斑鳩而小色純褐頂無花点世傳黄魚所變春多自海

諸州皆よし山中より產するを生捕て市店に出す大よき鶫鳥に似

漳州府志曰一種差大而青色名青鳩

竹視ヤマバトの書鳩なり

皆非なり

青鳩 產州府志 一名綠鳩 嶺南雜記 火鳩 陽春縣志

和名 アヲバト ヤマバト

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号 特7-71

ガラス使用

而起千百成羣化未及者翅尾尚存魚狀

此説もなるべく信ずかるべし

漳州府志曰一種差大而青色名青鳩小者綠觜足紅名紅鳩

一名紅鳩 漳州府志

和名ミヤマバト 屋久嶋古名 ワニバト 薩州方言

薩州の屋久嶋より出る他より来るなり

方言の山中より捉むるを大サ鳩のごとくして頗る肉多く金牙銀爪よく馴て羣を離れず胸

7
71

国立国会図書館　タイトル『飼籠鳥』　請求記号 特7-71

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『飼籠鳥』　請求記号　特7-71

ガラス使用